

「国家神道」再考 ―明治神宮鎮座百周年にあたって―

九州産業大学地域共創学部 准教授

平山 昇

「皇室の後ろには、神社有ると云ふ事を忘れてはならぬ」

明治の最後の年となった1912（明治45）年の2月、神社神道界の全国組織の機関誌である『神社協会雑誌』に、次のような論説が掲載された。

「国家の中心は、勿論皇室である。併し皇室の後には、神社有ると云ふ事を忘れてはならぬ」（丸山正彦「神社は我が邦徳育の中心たらざる可からざる事」『神社協会雑誌』第11年第2号、1912年。傍点は引用者。以下同様）

これを読んで不思議に思う人は少なくないだろう。皇室と神社が結びついているのはごく当たり前のこと。現代でもそうであるし、戦前であればなおさらだ。戦前の日本で「皇室＋神社」の崇敬が国民や植民地の人々に強制されたことを指して「国家神道」と言うではないか。それなのに、なぜわざわざこのようなことを主張しなければならなかったのか――？

答えは簡単である。明治末年の段階では、皇室と神社の結びつきは必ずしも自明のものではなかったからである。

もちろん、明治期にも皇祖神を祀る伊勢神宮には特別な敬意がはられ、これに「不敬」をはたらいたと喧伝された森有礼は暗殺されてしまった。だが、それ以外の大多数の神社については、皇室と結び付けて崇敬するという事は当たり前のことではなかった。実際、明治政府は伊勢神宮のみを重視し、それ以外の神社については国家との特別な関係をもたせずに独立自営させようとした

（山口1999）。したがって、少なくとも明治期においては「皇室は尊崇するが、神社は重視しない」という姿勢はとくに珍しいものではなく、咎められることもなかった。

おなじ『神社協会雑誌』の別の記事で「少しく社会の事情に通じ、目に漢洋の文字ある者は、神社に参拝するを以て、迷信の思想を発表するものゝ如くなして、之をなすを潔よしとせず」（岩崎英重「敬神教育」『神社協会雑誌』第20号、1903年）と記されているように、とくに知識人のあいだでは神社に参拝することを「迷信」として忌避する傾向が顕著であった。日清戦争・日露戦争の勝利を経て、明治天皇に対する国民の尊崇心は上下を問わず多くの国民のあいだに浸透していたが、これが必ずしもストレイトに神社崇敬に結びつきはしないというのが、明治末期の状況だったのである。だからこそ、神社界はわざわざ前述のような主張をしなければならなかった。

それでは、「皇室＋神社」という結びつきはいつ、どのようにして完全に自明のものとなったのだろうか。

「国家神道」という言葉を用いて、維新期から昭和戦時期まで一貫して「皇室＋神社」の崇敬が強制あるいは義務化されていたとするイメージが非常に根強い。だが、近年は日本近代史や神道史の実証研究の蓄積によってこのイメージは大幅に修正・再考を迫られている。本稿では、「国家神道」の固定観念を解きほぐしたうえで、「皇室＋神社」という結びつきが誰も疑いようのない自明のものになっていった過程について、本年（2020

年)に鎮座百周年を迎える明治神宮に着目して述べることにしたい。

「国家神道」像と教科書記述

筆者なりに要約すれば、従来の「国家神道」像とは、明治期から昭和戦時期までの帝国日本において、仏教やキリスト教など諸宗教のうえに「皇室+神社」が君臨し、このセットを崇敬することが強制され、従わない者たちは抑圧されたという歴史像である(村上1970, 島藺2010)。だが、このような「国家神道」像は、靖国問題や政教分離裁判など戦後史の過程で形成されたものであり、近年の実証研究の蓄積をふまえれば妥当な歴史像ではないとする見方が現在の歴史学・神道史・宗教史の学界で共有されるようになってきている(山口2018a, 藤田2019)。筆者もまたその一人である。

昭和戦前・戦中期において、皇民化政策にともなう神社参拝強制のように「皇室+神社」の崇敬を臣民として当然の義務と見なす風潮が帝国日本に蔓延したということは、間違いのないことである。では、「国家神道」像の何が問題なのかといえば、明治期から昭和戦時期までを一直線的にとらえてしまい、そのあいだに「皇室+神社」の関係をめぐって重大な変化が生じていたことを見えにくくしてしまったということである。昭和戦時期の抑圧状況を過去遡及的に明治期にまでストレイトに投影してしまったと言ってもよいだろう。

たいへん厄介なのは、この一直線的な「国家神道」像が、現行の日本史教科書の記述が生み出す^①印象。と見事に合致してしまうということである。すなわち、王政復古による祭政一致の立場をとる維新政府が神仏分離をすすめて全国で廃仏毀釈の嵐が巻き起こった、といった記述のあと、その後は神社神道に関連する記述がほとんど登場せず、ずいぶん時期が下った昭和戦時期の植民地における皇民化政策のところで、神社参拝が強制されたという説明がひょっこりと出て来る。まるで伏流水のようである。このような維新时期と昭和戦時期のあいだをすっ飛ばした記述の結果として、

近代日本では一貫して「皇室+神社」の崇敬が強制され続けたという^②印象。が生じてしまい、それが巷の「国家神道」像と見事にフィットしてしまうのである。

だが、現在の研究水準に照らせば、上記のような直線理解はもはや妥当ではない。維新时期の祭政一致の理想は挫折したし、廃仏毀釈は実情としては地域差が大きく、全国一律で吹き荒れたわけではなかった。昭和戦時期に植民地で神社参拝の強制があったのは事実だが、維新时期の神道による国民教化の延長上にこれを位置づけるのは今日の実証レベルに照らせばとうてい不可能である。神道・宗教にかぎらず、維新时期の諸政策は試行錯誤と紆余曲折の重なり合いのなかで展開したのであり、初発の方針がその後もずっと近代日本を決定的に支配したという単純で一直線的な理解はおよそ成り立たない。ましてや「維新时期と昭和戦前期を直結させるような議論などは言語道断である」(山口2020)。

もちろん、教科書記述と日進月歩で推移する研究水準とのあいだにギャップが生じるのは避けられないことであり、だからこそ本誌のように両者を架橋する情報誌がきわめて有益となるわけだが、「国家神道」に関してさらに厄介なのは、この言葉が現代の政治・社会・宗教の問題と絡んでメディアで頻繁に使用されるということである。いったんメディアで反復使用されるようになった言葉のイメージを修正するのは、なかなか容易なことではない。

「神社嫌いの男」がつくった明治神宮

これほど社会に広く「国家神道」像が定着しているゆえに、明治期には「皇室+神社」の結びつきが自明ではなかったと筆者が記しても、にわかには信じてくれない人もいることだろう。実際、筆者は研究者も含めてそのような反応を数えきれないほど経験してきた。そのような固定観念を揺さぶるために冒頭の史料を紹介したのだが、ここではさらに^③パンチ。がきいた実例を挙げてみた

い。

まずは、「日本資本主義の父」こと渋沢栄一である。渋沢は、新1万円札の顔やNHK大河ドラマの主演になることが決まり、今まさに熱い脚光を浴びつつあるが、今年に鎮座百周年をむかえる明治神宮を東京につくる運動を主導した人物でもある。

ところがなんと、渋沢は神社が嫌いだった。幕末生まれで儒学的合理主義を学びながら西洋化にも触れて人格形成をした渋沢は、神社仏閣に祈るという行為を「迷信」として忌避する人物だったのである。これは、渋沢の基本資料である『渋沢栄一伝記資料』をひもとけば容易にわかることである（現在は渋沢栄一記念財団ホームページでデジタル検索も可能）。

それではなぜ渋沢は明治神宮をつくる運動を推進したのだろうか。それは、尊崇する明治天皇の陵墓を東京につくりたいという願いがかなわなかったために、次善の策として仕方なく神社創建の道を選ばざるをえなかったという事情があったからである。

それゆえ、明治神宮の創建を推進したといっても、渋沢がこだわりをもって関わり続けたのは近代的な施設が集まる「外苑」であり、神社本体である「内苑」には関心をもたず、鎮座後もほとんど参拝しなかった。

興味深いエピソードがある。明治神宮が造営されているのとちょうど同じ時期に、松平定信を祀る神社をつくる計画が起こった。旧幕臣である渋沢は定信を篤く尊崇することで知られていたため、関係者たちは渋沢に協力を求めてきた。ところが渋沢は彼らに対して「神社ヨリモ、大ナル碑ヲ建設シテハ如何」と、神社案の見直しを促した。つまり渋沢にとっては、偉人顕彰の方法として、神社は決して最良でも自明でもなかったわけである。

皮肉にも、明治神宮の創建を推進し

た渋沢は、「皇室は尊崇するが、神社は重視しない」という明治期知識人の典型だったのである（平山 2020）。

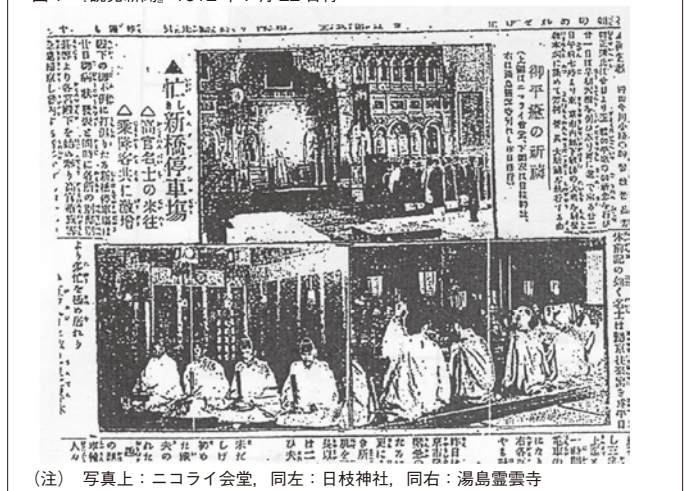
天皇のために「アーメン」を叫ぶ

つづいて「国家神道」の固定イメージをさらに解きほぐすために、1912年の夏に東京で起こった出来事をみてみたい。なぜなら、皇室と神社を切り離して想像する余地がこのときまではたしかに存在したことが見えてくるからである（以下、平山 2015 による）。

1912（明治45）年7月20日午前10時半、宮内省は天皇の病状が深刻であることを発表し、午後2時の『官報』号外でその詳細を公表した。この一報が伝わるや全国各地で平癒祈願が開始され、神社がその中心となった。ところが、ここに巨大な例外が存在した。「帝都」東京では、神社ではなく宮城二重橋前の広場が平癒祈願の中心地として浮上したのである。ただし、重態発表後すぐにそうなったわけではない。

宮内省発表をうけて、まずは市内の様々な寺院や神社で平癒祈願が行われるようになり、新聞各紙はその模様を詳細に報道し始めた。見逃してはならないのは、特に神社に偏ることなく神・仏・基がまんべんなく取り上げられたということである。たとえば『読売新聞』7月22日付は写真付

図1 『読売新聞』1912年7月22日付



きの記事を掲載したが（図1）、神・仏・基の平癒祈願を一箇所ずつ写しており、発表直後の平癒祈願報道の特徴を端的に示している。

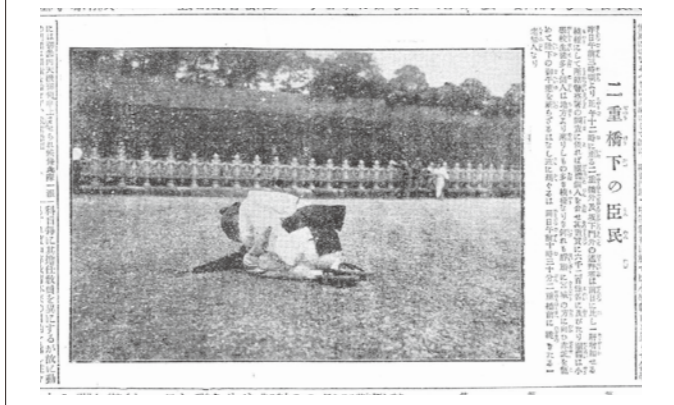
このように、東京では神社が平癒祈願の中心となることはなかった。この年の2月に内務次官床次竹二郎の呼びかけで行われた三教会同が報道関係者たちの念頭にあったことも考えられる。だが、最も直接的な要因は、後に誕生する明治神宮のような「中心神社」が東京に存在しなかったことである。実際、東京市長阪谷芳郎が市民を代表して平癒を祈願した神社さえ一つに定まっていなかった。阪谷は22日に神田明神と日枝神社において平癒祈願を行ったが、この両社はもともと江戸の惣鎮守、徳川家の産土神であったから、阪谷の平癒祈願は江戸の伝統の延長上で行われたとも言える。

さて、このように当初は平癒祈願の「中心」がない状態であったが、やがて浮上してきたのが宮城二重橋前広場である。ただし、この場所で平癒祈願の大群衆が発生するということは当初全く予想されていなかった。二重橋前で平癒祈願を報じる記事は、重態発表翌日ではなく1日おいた22日に初めて登場するが、当初は冷静な筆致であった。

ところが、27日になると「遙拝者皆泣く」「誰か至情に動かされざらんや」とにわかに熱を帯びはじめ、翌日には「行け！行け！二重橋の辺に！」とついに絶叫調となった。きっかけとなったのは、「二重橋下の臣民」と題された写真（図2）である。老婦人が、夏の暑さにも関わらず下駄を脱いで地面に土下座し、一心不乱に平癒を祈っている。この姿は人々に大きな衝撃を与えた。ある新聞記者はこのときの衝撃を「地に伏して祈るといふ事は言葉には聞かぬが、眼の当り之れを見るのは初めてゝあつた」と記している。

そして、同じく26日から大々的に報じられたのが、多種多様な祈祷者たちである。「砂利の上

図2『東京朝日新聞』1912年7月26日付



に跪き或は数名数十名、神道何々、仏教何々と記せる提灯の下に集まりて大般若経を誦するあり、心経を唱ふるあり、或は天に向ひて黙祷し地に俯して祈願するあり」（『東京朝日新聞』7月27日付）。このなかには涙を流しながら「アーメン」を叫ぶ者も混じっていた。

未曾有の光景が連日新聞でセンセーショナルに報じられ、それを読んだ人々が二重橋前につめかけて群衆が増幅し、報道がさらにエスカレートしていくことで、興奮はスパイラル状に高まっていった。しかも、この群衆のなかには、ふだんは神社や仏閣で「祈願」など決してすることのなかった知識人も含まれていた。当時、東京高等商業学校教授であった上田貞次郎の日記には、「二十六日 夜、二重橋外に集る群集に混りて御平癒を祈る。群集中には地上に座して頭を下ぐるもの、直立して呪文を誦するもの、火を掌中に点ずるものなどありて、余等の眼には稍異様の感あるも、兎に角敬虔熱烈の態を失はず。陛下に対する人民の感情美に打れざる能はず」と記されている。

ここで注意したいのは、このような光景が神社では決して生じ得なかったということである。当時の国民のなかには、渋沢や上田のように神社仏閣を「迷信」として遠ざける知識人たちがいた。キリスト教や浄土真宗の人々のように神社が含む「宗教」的要素に違和感を持つ人々もいた。あるいはまた、前述の上田が「大神宮様は台湾人や朝鮮人に取ては決して有難きものにあらざるなり」

と考えたように、「帝国」の拡大によって多民族化していくなかで神社は統治の障害になってしまおうと考える人もいた（その後の歴史でこの懸念は現実のものになってしまう）。神社はこのような人々を遠ざけてしまう。もちろん、多種多様な宗教的・民俗の祈願を神社で自由に行うわけにもいかない。

これに対して、二重橋前広場は天皇への近さを感じることができる上に「何もない空間」（原2003）であったがゆえに、宗教・信条にかかわらず誰もが思い思いの形で祈願することができ、「アーメン」すら叫ぶことができたのである。これが神社崇敬を絶対必要条件とする「国家神道」のイメージといかにかけ離れた光景であるか、贅言を要しないであろう。

「皇室将来の御信仰の自由」

天皇は7月29日夜（公式発表では30日未明）に「崩御」して、平癒祈願は終わりをつけたが、その直後から、渋沢栄一を筆頭に東京の政財界で天皇陵を東京に設けることを目標とする運動が起こった。だが、ほどなくして陵墓が京都にもうけられることが宮内省から発表されると、かわりに明治神宮を東京に創建すべしという世論が沸騰した。

その是非をめぐる『東京朝日新聞』の投書欄で論争が起こったが、反対者たちは決して「先帝」の追悼・記念に反対したのではなく、それを神社と結びつけることに異論を唱えた。理由はもちろん、神社が帯びる「宗教」性である。ここでたいへん興味深いのは、反対論者のなかに「皇室将来の御信仰の自由の爲め」という理由を掲げた者がいたということである。この者にとっては「皇室+神社」は自明でも正当でもなく、その結びつきは今後いっそう揺らいでいくとすら思われていたわけである。

このように、天皇への尊崇を神社だけに限定しない余地、あるいはもっと踏み込んで皇室と神社を切り離して考えるだけの余地が、明治末期まで

はたしかに存在した。

なお、維新後の宮中からは仏教的要素が排除されて神道に一本化されたと考えられてきたが、近年の研究では、維新後も様々な形で宮中に仏教が息づいていたことや、皇室の「信仰の自由」について明治政府が検討する局面があったことが明らかにされつつある（高木2016、山口2018b）。

失われた想像力

では、「皇室+神社」の結びつきを自明視してこれ以外のあり方を誰も想像すらできなくなったのは、なぜだろうか。様々な要因が考えられるが、筆者は明治神宮の誕生がかなり重要な契機になったと考えている（平山2015、同2018）。

前述したように、陵墓のかわりに明治神宮をつくることには様々な批判が出たが、結局この計画が確定すると、二重橋前平癒祈願で発露した「国民全体の至心至誠の結晶」が明治神宮を誕生させたというストーリーが繰り返し語られるようになり、「アーメン」の叫び声さえ混じっていた事実は人々の記憶から消去されていった。

かくして自明化された「皇室+神社」という結びつきは、大正9（1920）年に明治神宮が創建されて多数の参拝客が訪れるようになったことで、いよいよ揺るがし難い既成事実となっていく。ある内務官僚が「それ〔明治神宮創建〕から後には大蔵省に往つて、神社のことについての予算の談判をするにも、気楽に談判が出来るやうになつた」と回想しているように、明治神宮の賑わいは神社行政全般に明るい光を注ぎ込むほどのインパクトをもたらしたのである。

さらにいえば、明治神宮は東京の正月参詣も大きく変えた。従来は浅草寺・成田山・川崎大師といった寺院が人気を集める「寺社」の参詣であったが、明治神宮が「初詣の中心神社」となることで「社寺」の参詣へと姿を変える。また、毎年異なる方角の寺社に参詣する恵方詣は、明治神宮が誕生すると急速に衰退した。恵方に関係なく毎年明治神宮に参拝する「初詣」が人気を集めるよう

になったからである。明治神宮の「出現」は、その後の関東大震災ともあいまって、東京の正月参詣における「江戸」の残滓を追い払う役割を果たした。

正月にかぎらず明治神宮はことあるごとに「帝都の中心神社」としての機能を果たすようになる。1926(大正15)年12月、大正天皇が重態に陥った。このときの平癒祈願の新聞報道をみると、圧倒的に大きい比重を占めているのは「二重橋前+明治神宮」であり、1912(明治45)年の平癒祈願とは大きく異なっている。「神社仏閣」「神仏」という表現もみられるなど仏教は一定の存在感を見せてはいるが明らかに比重が低下している。そして、キリスト教徒も平癒祈願を行っていたにもかかわらず、報道されなかった。

このような明治神宮のインパクトをさらに大きくしたのが、伊勢神宮参拝ブームとの結びつきである。伊勢神宮は第一次大戦中から大衆ツーリズムの勃興とともに参拝客が急増しはじめていたが、この流れが新しく誕生した明治神宮と結びつく。その結果、この両神宮を参拝するという「体験」をして「荘厳／厳粛／清々しい」といった「気分」を味わうことを賛美する風潮が広がり、昭和期に入るとこれに同調できない者に対して「本当の日本人ではなく、壊れた日本人、精神的に片輪の日本人」(『皇国時報』第586号、1936年)などと差別的な言葉が投げつけられるようになっていった。

このようにして、新しく誕生した明治神宮が大勢の「国民」がつかめる人気神社となり、「伊勢神宮+明治神宮」の参拝客が右肩上がりが増えていく「事実」の重みによって、明治末期までは必ずしも自明ではなかった「皇室+神社」の結びつきが絶対化されていき、「皇室」だけでなく「皇室+神社」をあわせて尊崇しなければならない時代が到来した。「皇室を尊崇しない者」だけでなく、「皇室は尊崇するが、神社は重視しない」という人までもが抑圧され、息苦しくなる状況が生じたのである。

なお、明治神宮がもたらしたインパクトについて補足すると、「内苑／外苑」によって「聖／俗」の区別を徹底するというこの神社の空間設計が、それまで聖俗混淆が当たり前だった全国各地の神社のあり方を変えていったことも近年の研究で明らかになっている(藤田ほか2015)。伊勢神宮でも明治期から「清浄」な空間づくりがなされたが(グリーン2015)、「神社=清浄」という潔癖症的な固定観念を帝国全土に広めたという点では、明治神宮のインパクトが圧倒的に大きかった。

歴史の皮肉

京都に奪われた陵墓の代わりとして仕方のない選択肢だったとはいえ、「皇室+神社」の結びつきを絶対化する突破口となる神社の誕生を主導したのが、自らは神社を好きになれない渋沢栄一だったというのは、まさに歴史の皮肉としか言いようがないだろう。

本稿を締めくくるにあたって、渋沢が明治神宮の外苑にこめたメッセージとその末路についても記しておきたい(平山2020)。

1924(大正13)年、米国で排日移民法が成立したことで日本国民の対米感情は劇的に悪化した。それは、ふだんはいたって温厚な性格のある農村青年が「[米国と戦争をして] ヤンキーの睾丸を引抜いてやるんだ」「戦が[を]始めれば良いが」と思う。勇ましい戦、無茶な戦。此の戦の後に国家が倒れても良い」とまるで別人のような言葉を日記に書きつけたほどであった(『胡桃澤盛日記一』「胡桃沢日記」刊行会編・刊、2011年、1924年4月1日条、同6月7日条)。

感情を害されたのは渋沢とて例外ではなかった。この3年前には排日問題の悪化を食い止めようと、老齢をおして4回目となる米国訪問を行った。それなのに、排日移民法が成立してしまったのだから、渋沢の無念は尋常なものではなかった。だが、それでも渋沢は「無茶な戦」へと突き進んで「此の戦の後に国家が倒れても良い」と自暴自棄になることはなかった。伊豆下田の玉泉寺にハリ

ス記念碑を建立したり、米国からの親善人形使節（「青い目の人形」）の関連行事を大々的に行ったりするなど、日米の国民感情の融和のために人生最後の力を振り絞って様々な活動を行った。

そんな渋沢が、亡くなる前年（1930年）に明治神宮外苑の聖徳記念絵画館に一枚の壁画を奉納した。表題は「グラント将軍と御対談ノ図」。1879（明治12）年に日本を訪れた米国のグラント将軍が明治天皇と会見したときの模様を描いたものである。渋沢は、神社本体である内苑には関心をもたなかったが、外苑には「日米の融和」という明確なメッセージをこめたのである。

高校で歴史を教える先生方はここでお気づきになるであろう。高校日本史教科書で明治神宮が登場する事項といえば、学徒出陣壮行会である。1943（昭和18）年10月21日、雨が降りしきるなか明治神宮外苑の競技場で行われたのが、対米戦争に駆り出される学徒たちの壮行会だった。渋沢が外苑にこめた思いは、最悪の形で踏みにじられることになってしまったのである。

新1万円札や大河ドラマによってすでに熱を帯びている渋沢顕彰ブームは、本年は明治神宮が創建百周年を迎え、しかもこの神宮の外苑ゆかりの土地で東京オリンピックが開催されることもあって、「明治神宮をつくった渋沢栄一」というストーリーを付け足しながらさらに増幅していくだろう。だが、そのようなブームの陰にかくれてしまいがちな、しかし決して忘れてはならない歴史があるということを、教科書の学徒出陣壮行会の写真とともに生徒諸君に教えていただければと願ってやまない。

参考文献

- 磯前順一（2003）『近代日本の宗教言説とその系譜』岩波書店
島藺進（2010）『国家神道と日本人』岩波新書
高木博志（1998）『近代神苑試論』『歴史評論』573
高木博志（2016）『近代皇室における仏教信仰——神仏分離後の泉涌寺を通して——』『祭祀史料研究会編『祭祀研究と日本文化』塙書房
原武史（2003）『皇居前広場』光文社新書
平山昇（2015）『初詣の社会史——鉄道が生んだ娯楽とナショナリズム』東京大学出版会
平山昇（2018）『「体験」と「気分」の共同体——20世紀前半の伊勢神宮・明治神宮参拝ツーリズム——』『思想』1132号
平山昇（2020）『「明治神宮をつくった男」 渋沢栄一の葛藤』RONZA（朝日新聞 DIGITAL）
藤田大誠編（2019）『国家神道と国体論——宗教とナショナリズムの学際的研究』弘文堂
藤田大誠・青井哲人・畔上直樹・今泉宜子編（2015）『明治神宮以前・以後——近代神社をめぐる環境形成の構造転換』鹿島出版会
ブリーン、ジョン（2015）『神都物語——伊勢神宮の近現代史』吉川弘文館
村上重良（1970）『国家神道』岩波新書
山口輝臣（1999）『明治国家と宗教』東京大学出版会
山口輝臣（2005）『明治神宮の出現』吉川弘文館
山口輝臣編（2018a）『戦後史のなかの「国家神道」』山川出版社
山口輝臣（2018b）、小倉慈司・山口輝臣『天皇の歴史9——天皇と宗教』講談社学術文庫、2018年
山口輝臣（2020）『宗教史研究——最前線の再構築』、小林和幸編『明治史研究の最前線』筑摩選書